

青少年育成センターだより

第24号 平成29年8月



江戸時代を代表する夏の句2首を紹介します。

閑さや 岩にしみ入る 蟬の声

松尾芭蕉

すずかぜ
涼風の

曲がりくねって 来たりけり

小林一茶



鳴いている蟬の種類も変わってきているようで、暑かった夏もそろそろ終わりに近づいていることを感じます。「もう夏も終わるのだ」と思うと少し寂しい気持ちがわいてくるものですね。その気持ちは大人も子どもも同じようです。

みなさんの子どもさんたちは、もう宿題は全部済ませているでしょうか。子どもが焦っている姿を見て、親としてつい手を出してやりたくなるのですが、ここはぐっと我慢して自分の手でやらせることが大切です。そのことは子どもたちが自立することにつながります。

子どもたちが身につけなくてはならないものとして大切なのは「自立」なのです。ここで手を貸してしまうと身につけなければならない大切なものが身につかなくなってしまうので、ぜひ、最後まで自分でさせるようにしましょう。

家庭の躰

この「青少年育成センターだより」は、今年の8月から発行を始めて、一周年を迎えました。

最近、学校の先生たちから「子どもへの関わり方について考えさせられました」「次の話を期待しています」、市民の方から「子育ての参考にしています」「楽しみに読んでいます」等の言葉をいただくことが多くなりました。大変うれしく思っているところです。

この青少年育成センターだよりは、「子育てや子どもへの関わり方を市民の皆さんと一緒に考えていきましょう」という目的で発行を始めました。子育ては社会全体で取り組むことも大切ですが、「子どもの躰は家庭から」とよく言われるように、躰の原点はやはり家庭でしょう。

「子どもは褒めて育てる」と言われたり、また逆に「子どもをもっと叱りなさい」とも言われたりします。どちらが正しいのか、考えさせられます。褒めて伸びる子もいるでしょう、逆に褒めすぎるとよくない子もいるでしょう。子どもは一人ひとりみんな違い、親もみんな違うのです。子育てには「こうすればよいのだ」という確実な方法があればよいのですがそれはないようです。子育ての方法はそれぞれの家庭にあってもよいのだと思います。

また、真剣に子どもに向かいながらも、時には「どうにかなる」とおおらかに考えてもよいのではないのでしょうか。子どもも思ったよりは親の思いを分かってくれていることが多いのです。大切なのは、その根底に、あふれるような愛情があり、そしてその愛情を子どもが感じる事ができればいいのだと思います。

子育てについて、おじいちゃん、おばあちゃんに聞く、近所の子育てのベテランに聞く、本を読んでみる等を参考にするのもよいですね。

みなさんの家庭の躰を家族と一緒に考えてみませんか。